

柔道ルネッサンススピーチ

2006. 4. 29 全日本選手権

金野 潤



皆さん、こんにちは、ただいまご紹介に預かりました日本大学の金野です。

全日本選手権も大変な熱戦が展開されています。ベスト8も決まり、いよいよこれからが佳境を迎えようとしております。ご観覧そして、関係者の皆様も「早く試合が見たい」と思っているに違いありません。もちろん、私もその中の一人です。試合前の大切な時間ではありますが皆様の時間をほんの少しいただき、わたくしの話に耳を傾けていただけないでしょうか。

全日本柔道連盟と講道館は柔道ルネッサンス活動を推進しています。その中には勝負に勝つことだけにこだわりすぎないこと、柔道が本来持つ精神性をもっと大切にしていこうというものがあります。「勝つこと」、「チャンピオンになること」はとても素晴らしいことです。昭和を代表する大文豪であり柔道家でもあられる井上靖先生は著書の中で「勝つことに己の全てをかけずしてなんの柔道ぞや」と仰っています。わたくしもまったく同感です。とくに若い柔道選手は「勝っても負けてもどちらでもいいや」なんてことは言わずにひたむきに「勝利」を目指してほしいと思います。わたくし自身も選手時代、この全日本選手権で優勝することを夢見て毎日の稽古に汗を流していました。その夢が叶い、表彰式で手渡された天皇杯の冷たいずっしりとした感触は今もこの手に残っています。しかし、わたくしは昨日のことのように自分自身の試合を覚えています、今の子供たちはわたくしの試合を見たことがないと思います。また、見てくださった皆様もその試合の記憶は年々薄れていることと思います。

ここで皆さんに二つのことをお試しいただきたいと思います。まず最初に5年前、10年前の全日本選手権、その前後に行われた世界選手権、オリンピックのチャンピオンの顔と名前を思い出してみてください。どうでしょうか？もちろん「俺は即座に全部しっかりと思い出せるよ」という方もいらっしゃると思いますが、ほとんどの方は思い出すのに少し時間が必要になるのではないのでしょうか。では、今度は皆さんがお世話になった先生、尊敬している先輩、感謝している友人、後輩の柔道家皆さんの顔と名前を思い出してみてください。どうでしょうか？一つ目の質問よりも早く鮮明に思い出せるのではないのでしょうか？皆さんが頭に思い描いた人々はきっと皆さんに大きな素晴らしい影響を与え、心に生き続ける柔道家の方々だと思います。

わたくしにも忘れられない柔道家がいます。その方は全日本チャンピオンでも世界チャンピオンでもありません。その方は大学で柔道をされていましたが、ご家庭のご都合で中退さ

れ創設間もない会社に入社し、朝から晩まで汗まみれになりながら働き、忙しい中で時間を見つけ、大好きな柔道を続けられていました。上司になられてからは若い柔道家のため、柔道界のため大変なご尽力をされていました。その方は病に倒れお亡くなりになりましたが、亡くなる数日前に私が病室を訪ねたとき、度重なる手術で体中に傷をかかえ、ほとんど起き上がることもできませんでした。明日にも自分の命の灯が消えるかもしれないという極限状態の中でも泣き言ひとつ言わず、かすれた声で最後まで柔道界、若い柔道家のことを心配される発言をしていらっしやいました。私はこの方からたくさんのことを学びました。その中で、最も印象に残っていることは、この全日本選手権で初優勝したそのすぐ後のことです。初優勝で私は有頂天になっていました。今思えば自分の行動、発言は尊大なものになっていたと思います。いわゆる「天狗」になっていました。

そんな時自分の上司でもあるその方にこっそり呼ばれてこう話をされました。

「金野！いまのおまえはなっちょらんぞ！全日本選手権で勝つということは柔道家の最高の榮譽を手に入れたんじゃ。榮譽という位を手にした以上おまえは柔道界に恩返しをしなければいけない務（つとめ）を負ったということじゃ！お前は人の嫌がることこそやっていかなければならない義務を負っていることを忘れちゃいかん。今のお前ではお前に負けた柔道家達に対しても失礼だ！」そうお叱りを受けました。「位高ければ務め重し」その時その方に教えていただいたことです。私はそのとき、ほんの少し柔道が強いくらいで偉い人間になった気がして尊大に振舞った自分自身の浅はかさを大いに恥じました。そして、言いにくいことを私に言うてくださったその方に心より感謝しました。

その方に言われたような柔道界への十分な恩返し、自分の務めが果たされているとは、まだまだ到底言えるものではありませんが、天皇杯の感触をこの手に思い出すとき、自分の務め、柔道精神そして、その方のお名前とお顔を同時に思い出すことができます。

多くの人々の脳裏に鮮明に焼き付けられる「勝つこと」、「チャンピオンになること」これもまた、才能と大変な努力を駆使した偉業だと思います。

その一方で、決して多くの人ではないかもしれませんが、柔道精神とともに人々の心の中で静かに息づき継承されていく。これもまた、柔道のもつ大きな偉業だと思います。

日本は柔道が生まれた国です。そして、前回のオリンピックでも最多のメダル獲得数を誇る世界柔道のトップを走っています。日本柔道がその栄冠を持つ以上、柔道精神を最も体現しなければならない務めがあると私は考えます。それはトップの選手、指導者たちだけが考えればいいことではなく、我々柔道家の一人一人が考え、行動をしていかなければならないことです。大きなことなく、ほんの小さなことでも、その積み重ねが大きな力になっていくと考えます。今こそ皆さんの力が必要なんです。

もし、日本柔道が「強さ」という片翼だけで飛び続けるならば、どこかでバランスを崩し、力尽きてしまうでしょう。しかし、強力な「強さ」としなやかな「柔道精神」という両翼で飛び続けるならば、我々は更なる高みへ行けるとわたしは確信しております。

皆で力を合わせてがんばりましょう！

少々はながしなが長くなり申し訳ありませんでした。皆様、ご清聴ありがとうございました。

それでは共にこのあとの熱戦を皆様と共に楽しみたいと思います。